安心・安全な水をめざして・・・
維持管理業務

特集 災害と水道 ライフラインの維持を使命として

自然災害は、我々の想像を超えて発生するものですが、
多くの人たちによって復旧作業が行われ、市民生活の安定が図られます。

昭和42年の大水害

昭和42年7月9日、伊万里地方は死者12名、重軽傷者435人、被害総額約120億円にも及ぶ大水害に見舞われました。水道施設においても、ポンプが水に浸かり断水状態になりました。また、口径200ミリの漁港線や口径150ミリの川北線が添架されていた幸善橋が流されたため、その上流の公園橋からバイパスを作って、翌日には給水を開始しました。当時宿直で勤務していた前田武男さんの「職員は水害後４日間濡れたままで、家にも帰らず給水作業や配管作業を行いました。できるだけ早く水がでるよう職員みんなで頑張りました。」という話を聞くと、当時の水道マン達の水道復旧に対する情熱を感じます。

また、自衛隊に給水活動の応援を受けたことも忘れてはならないことです。

昭和42年7.9災で
露出した配水管

昭和57年7月の長崎大水害

昭和57年7月23日、総雨量565ミリという記録的な豪雨により、長崎市が大規模な水害におそわれました。長崎の水道は完全復旧までに16日もかかるほど被害が大きく、伊万里市でも救援（給水）活動として２トントラック２台を派遣しました。

給水活動に参加した栗原忠義さんは、行く先々で「災害の時に一番必要な水をよくぞ運んでくれた。」と涙ながらに感謝されたのが今も思い出として残っているそうです。

平成６年の渇水

平成６年の夏は梅雨期以降、例年になく雨量が少なく、加えて猛暑続きのため市内の飲料水や農業用水などは極めて深刻な事態となりました。そのため、やむをえず8月と9月の夜間に２回12時間断水を行いました。本市では、昭和42年、同44年に断水がありますが、竜門ダム完成以降は経験がなく、実に25年ぶりの断水となりました。

これによりしばらくの間小中学校の給食がパンや牛乳などの節水メニューに替わり、熊本県菊池市からは“友情の水”1200㍑が届けられました。また水稲や果樹などの農作物にも被害が広がり、松浦町や東山代町、南波多町などでは必死の「雨乞い」が行われたようです。この年の水不足は秋以降も続き、節水への協力が呼びかけられています。

川底が露出した有田川

雨乞い

阪神大震災の被災地への水道復旧応援

平成7年1月17日午前5時46分、震度7.2を記録した「阪神・淡路大震災」は水道施設にも大きな被害をもたらし、兵庫県内を中心に地震直後の断水戸数は約120万戸にものぼるという事態となりました。本市も被災地へ応急用として20㌧給水タンクを送りました。また2月23日から3月3日まで佐賀県災害復旧支援隊第4陣（１０名）として職員2名（浦川富美男氏・山口輝彦氏）、管工事組合所属職員2名（藤山晋吾氏・渡辺了太氏）が神戸市灘区で漏水している配水管の復旧修理にあたりました。

配水管の復旧工事

「災害復旧支援」車で応援に

平成18年豪雨災害

平成18年9月16日土曜日の早朝、台風13号に刺激された秋雨前線より、伊万里市では時間最大99㎜（日雨量285㎜）の記録的大雨が降りました。特にこのときの雨は黒川町、南波多町及び大川町など市の北部から東部の地域に集中して豪雨をもたらし、死者3名、地滑り、山崩れや河川の氾濫等甚大な被害を受けました。被害額は、河川・道路等438カ所20億6千万円、農林地・農業用施設・農畜産物で29億6千万円に及ぶ大災害となりました。

水道施設においても、南波多町府招地区や黒川町干潟地区の道路が地滑りで被害を受け、特に府招地区では国道202号が通行止めとなり、そこに埋設していた南波多町内全域（黒川町の一部まで）へ給水するための主要送・配水管が破損したため、区域内全戸が断水し応急復旧作業に4日間かかりました。

国道202号地すべりによる配水管の仮設復旧工事